

事項	<p>水稻品種「まっしぐら」による水稻疎植栽培で基肥窒素量を増肥した場合の生育及び収量性</p>		
ねらい	<p>「まっしぐら」による栽植株数を坪当たり37株とする水稻疎植栽培について、慣行よりも基肥窒素量を2～3割増肥した場合の生育、収量性を明らかにしたので、参考に供する。</p>		
指導参考内容	<p>1 「まっしぐら」による坪当たり栽植株数を37株とする水稻疎植栽培において、基肥窒素量を標準施肥（5 kg/10a）よりも2～3割増肥したときの生育及び収量は以下のとおりである。</p> <p>(1) m²当たり穂数及びm²当たり籾数は、標準施肥より5%程度多い傾向である（図1、図2）。</p> <p>(2) 収量は、標準施肥より3～6%程度増収する（図3、表1）。</p> <p>(3) 玄米蛋白含有率は、標準施肥と同等である（表2）。</p> <p>(4) 稈長は標準施肥と同等から4 cm程度長くなったものの、倒伏はみられなかった。</p>		
期待される効果	<p>坪当たり栽植株数を37株とした水稻疎植栽培の増収効果が期待される。</p>		
利用上の注意事項	<p>1 本成果は、主食用米を生産する場合に適用する。</p> <p>2 春季の気象が多照・少雨となった場合は、乾土効果による土壌窒素発現量が多く、増肥による増収効果が得られない可能性があるため、基肥窒素量は慣行並とする。（4月が多照・少雨の平成26年は、基肥窒素量の増肥による増収効果が得られなかった。）（図3、表3）</p> <p>3 基肥窒素量の増肥は、2～3割までとする。これ以上の増肥は、食味の低下を招くので行わない。</p> <p>4 追肥は、増肥せずに慣行の施用量とする。</p>		
問い合わせ先（電話番号）	農林総合研究所 作物部（0172-52-4396）	対象地域	県下全域
発表文献等	<p>平成25～27年度 試験成績概要集（農林総合研究所）</p>		

【根拠となった主要な試験結果】

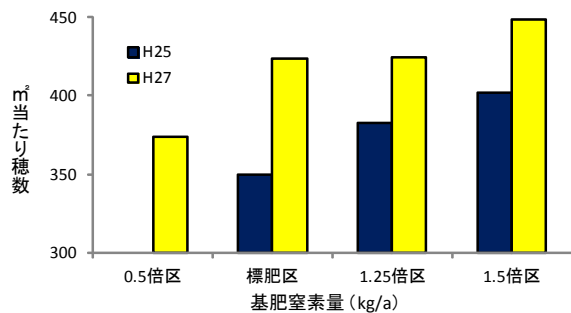


図1 基肥窒素量とm²当り穂数
(平成25、27年 青森農林総研)

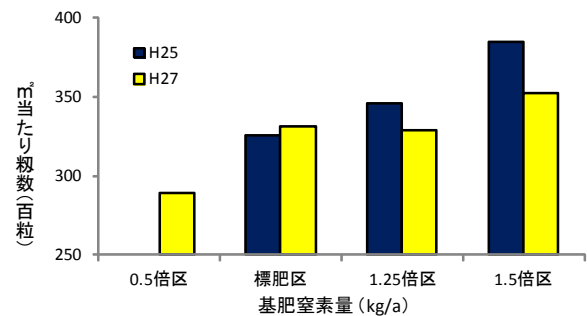


図2 基肥窒素量とm²当り粒数
(平成25、27年 青森農林総研)

(注) 標肥区の基肥窒素施用量は農林総研の慣行で5 kg/10a。
追肥量は3 kg/10aとした (以下、同様の扱い)

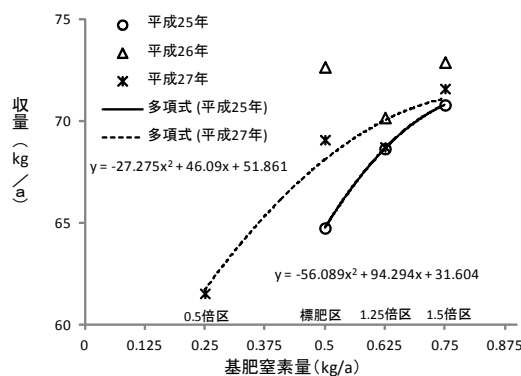


図3 基肥窒素量と収量
(平成25～26年 青森農林総研)

表1 基肥窒素量と収量 (平成25、27年 青森農林総研)

基肥窒素量	平成25年		平成27年	
	収量 (kg/a)	標肥区対比 (%)	収量 (kg/a)	標肥区対比 (%)
標肥区	65.4	100	68.1	100
1.25倍区	69.3	106	70.0	103
1.5倍区	71.4	109	71.1	104

(注) 表中の収量は、図3の回帰式から算出した。

表2 基肥窒素量と玄米蛋白含有率 (平成25～27年 青森農林総研)

基肥窒素量	平成25年		平成26年		平成27年	
	玄米蛋白含有率 (%)	70株対差	玄米蛋白含有率 (%)	70株対差	玄米蛋白含有率 (%)	70株対差
標肥区	7.6	-0.2	6.6	-0.1	6.9	0.1
1.25倍区	7.7	-0.1	6.5	-0.2	7.0	0.2
1.5倍区	7.8	0.0	6.6	-0.1	7.2	0.4

(注) 平成25年、26年は米粒食味計 (CTA10C : サタケ社製)、平成27年はインフラテック1241 (FOSS社製) による測定値 (乾物換算)。

表3 試験期間の4月の気象 (平成25～27年)

要素	平成25年	平成26年	平成27年	平年
平均気温 (°C)	6.5	8.0	9.5	8.3
降水量 (mm)	84	14	48	53
日照時間 (hr)	174	256	206	176

(注) アメダス黒石の観測値で平均気温は平均値、日照時間及び降水量は積算値

(参考) 基肥窒素量を2～3割増肥したときの肥料費

標肥 : 約6,300円/10a

増肥 : 約7,600～8,200円/10a

(注) 尿素複合リン加安17-17-17 (2,700円/20kg、現物47kg/10a、窒素成分8 kg/10a)

(「主要作目の技術・経営指標 (青森県農林水産部、平成27年9月)」より引用)